

部分的全体感覚

——心のつながり——

中野 貴仁*・荘司 泰弘

Das Gliedganze

by

NAKANO Takayoshi*, SHOUJI Yasuhiro

(Received May 15, 2002)

キーワード：部分的全体、共同感情、感情移入、思いやり、やさしさ、異年齢同集団

1. はじめに——近年、家庭や地域において、大人が子どもに対して暴力を振るう幼児児童虐待の状況を映像で確認したり、時事問題で取り上げられたりすることがある。大人が子どもに虐待する行為は、年齢を重ねた、豊かな経験により、知識と力を持ち得た強い者（大人）が、まだ五感が総合化した状態（未分化）である弱者（子ども）に対し、知識と力を持って自己の主観を誇示し、弱者の立場と考えられる子どもを強制的に押さえつけるように支配し、心身共に屈させる行為であると考えられる。社会的弱者と考えられている子どもを、虐待によって強制的に支配することは、子どもの身体的・精神的伸張に障害をきたす行為であり、子どもの伸張を援助していく我々教育者として、遺憾を感じる事柄である。ならば、なぜ現代において頻繁に虐待が起こるのであろうか。私は大人が子どもに虐待する要因として、二つの要因があると考えている。

一つ目の要因は、異年齢の人間同士の心の関わりが希薄になっていることが挙げられる。現代社会の核家族化、少子化や機械化が発達しバーチャル世界へ自己を求めていることが多くなり、大人と子ども、子ども同士が幼い時期から人間関係を持つ機会が少なくなった。一人の世界に陥ることによって、他者との関わり方を忘れ、表面的な関係でしか相手と接することができなくなっているのである。他者との関わりが希薄になるにつれて、他者との関係の作りを子ども自身が生得的に持っている感覚で感じられなくなっていると言えよう。

二つ目の要因として、保育者や教師の教育現場における子ども達に対する支援の仕方がある。早期教育、教科偏重主義からの影響で、科目のみで競い合うことを子ども同士に強要し、他者と助け合い協調することを伝えなかったため、子どもの自身生得的に持つ他者と助け合う心を萌芽してこなかった事を指摘したい。とはいえ、現在の教育は、幼児期における遊びの重視や小学校低学年の「生活科」、中・高学年の「総合的学習の時間」などによって、自然やたくさんの物、異年齢の人々に直接触れ合い、体験を重ねることを重視

*宇見小学校教諭

することを強調することによって子どもの人間性を豊かにしていくことに配慮し、学力偏重主義の教育課程は徐々に改められていっている。だが、体験重視の教育課程を担っていく教師が教育課程が変更されるたびに、一つ一つの事柄に手本となるマニュアルを必要としている。マニュアルを求める教師は、今現在、子どもにとってどのような体験活動が必要かを見失っており、子ども達の目線に立った考えをせずに、マニュアルにしたがった大人（教師）の主観で子ども達に体験活動を強要している傾向があることに問題があると考ええる。つまり、現代の教育で子ども達に一番必要と考えられている教育は、相手のことを考えた行動や言動をとれる人間性の萌芽する教育であると言えよう。すなわち、相手との関係を確立していく人間性の「思いやり」（die Rücksicht）や「やさしさ」（die Freundlichkeit）の心を萌芽する教育が必要とされているのである。「思いやり」や「やさしさ」が萌芽する教育は、幼児期から人間同士の関わりを重視することによる結果であり、教科教育の重視、発展性のない管理された本などのマニュアルを必要とする教育内容と実践では、到底萌芽しないと見えよう。

キリスト教信者である教育論者フレーベル（Friedrich Fröbel 1782-1852）の『人間の教育』における「部分的全体（das Gliedganze）」感覚という神性の観点を通し、大人の虐待につながる二つの要因を考察することによって、現代教育に必要な人間同士が心のつながりができるようにするためには一体何が必要かを論じ、現代の教育の現状に対する教育方法を考察していく。

2. 部分的全体感覚——フレーベルは「人間の教育」の総論において、「神は万物の唯一の本源であって、万物の中に存在し、万物を生かし、かつ万物を支配している」^(6a)と指摘し、人間を含めた万物の中には、神の精神である神性が生命の誕生から行動までに強く影響を及ぼしていると述べている。ゆえに、子どもは生まれながらにして、四肢の伸張、感官の発達、人間性に至るまで、神の精神である神性を引き継いでいるのである。神の精神が生まれながらにして反映している子ども達は、自然および時間における諸現象およびすべての生命全体と調和しながら、自己を対立するものの中で生命を把握したり、生命との関係を明らかにし、自己の役割を認識していくことができるのである。子ども達は対立調和しながら、お互いの均衡を保ち、他者との関係を確立したり、自然界の動植物に対しての役割を果たそうすることに努力していく。役割を果たそうと努力することから、子ども達は、自然界すべてのものと同じ空間、同じ場所に存在し、新たな文化を精選しながら共同して生活するようになる。子ども達は自然界の事物と共に存在し、共に繁栄してしようとする「共存共栄」の精神を使命として予感していくことができるのである。子ども達が、共存共栄の使命を予感するためには、お互いの者同士が同じ事柄に共感し、共通する感情を共同に所有できる感情である「共同感情」（Gemeingefühl）を持ち得ている。ゆえに、共存共栄の感覚につながる協調性や、他者に対する思いやりややさしさを生まれながらにして自己の内的力として持ち得ていることを予感できるのである。また、フレーベルの神性の思想は、子どもを取り巻く共同感情と共に、部分的全体感覚にも繁栄されていると考えられる。部分的全体は、フレーベルが人間の教育において、共同感情とともに論じられている人間を含む万物全体を支配している共同原理の一つであり、部分的全体の意義についてフレーベルは、「私自身は部分的全体であり、人類は生命全体の部分である。そして

私は人類の部分的全体である。だから私は人間であって、しかも生命全体を内にもっている完全な人間なのである。あたかも蕾がその本質と発展の全体性を内に秘めつつ樹木についているように、私は、人類という生命の樹木についている一部分なのである。つまり私は、自分だけを取りだせば唯一のものであるがしかし孤立したものではない。ちょうど私のうちにも生きていてそして私の本質を形成している全体の生命のように、私は全体であってしかも唯一のものなのである。それゆえ私の最も内奥にある万物の生命を外部にあらわすようにすることが私の使命である。しかし私は全体の部分でもある。したがって私は、部分であって同時に全体であり、人類の部分的全体である。こうして私の生命はひとつの完全な生命であるということになる。なぜならば私は私の内部で、全体的で完全な人類の生命を、完全に充実した人類の生命を生きるからである」^(7-a) と記している。フレーベルは人類を万物全体の一部であり何一つ欠けることのできない存在であると考え、すべての万物はそれぞれに万物全体に対して、何らかの役割を担っていると指摘しているのである。部分的全体という感覚を共有することによって、万物は共存共栄の使命を予感し、同じ地上において生活を共にすることができ、文明や文化などの要素から人間の心に影響を及ぼす人間性である「思いやり」や「やさしさ」を予感することができるのである。したがって、部分的全体感覚と共同感情により、人間は一人一人の万物全体に対する役割を担っていることを予感し、自覚することによって、相手の存在を認め、他者との共生をするための人間性を伸張することができると思われる。

3. 現代の子ども達——現代の子どもは子ども同士の関係が希薄になっており、他者との協調性の欠如を生みだし、他者に対する思いやりの感情が失せているとよく言われ続けている。確かに、現代の子ども達は相手の迷惑を考えず道路や駅の階段、コンビニエンスストアの前に座り込んでいたり、平気で凶器のナイフや言葉、肉体の暴力によって他者を心身共に傷つけるなど、相手を考えた行動や言動が取れてはいない。他者を心身共に傷つけると他者はどうなるかを知ってはいるが、衝動的な感情を押さえ込めず、他者を傷つけてしまう子ども達がいる。しかし、現代の子ども達の傾向を生みだしてきたのは、今までの子ども達に接してきた大人や子ども達が受けてきた教育による負の要因であり、子ども達自身が生まれ持った要素ではない。子ども達には、人を傷つけてたり、斥けたりすることを生まれながらの使命として持ち得ているのではなく、逆に、同じ地上で他者と上手く共存し、共に繁栄していく感覚である共存共栄の使命を予感する感覚を生得的に持っていると考えられる。子ども達に友達に対しての想いを聞いてみたところでも、「友達がいっぱい欲しい」、「たくさんの人と遊びたい」などの声が返ってきている。やはり、子ども達は、人と関わってみたい、人と心がつながってみたいということを感じ取っていると言えるのである。つまり、生得的に持ち得ている部分的全体感覚や共同感情を基にして、生得的に持ち得ている他者との協調性を生み出す「思いやり」や「やさしさ」を予感し、伸張している考えたフレーベルの教えは現代の教育にこそ必要ではないだろうか。

4. 感情移入——現代の子ども達および大人達は、他者との関係が希薄になることにより、心の関わりが薄れていると言われている。しかし、人間には自己の伸張により、自己と他者をつなぐ手段を生活上で使っている言語によるコミュニケーション、身振りなどの身体的仕草によるコミュニケーション能力を備えていくことにより、円滑な人間関係を築く可

能性を秘めている。また、人間はコミュニケーション能力を活かし、相手との距離を近づけ、他者との心のつながりを強く感じさせることができるのである。特に大人は、他者との感情交換をコミュニケーションを中心に、言語作用の手段を使って強く結んでいこうとする。言い換えれば、大人は身体よりも頭が先に働き、頭で構想を練り、試行錯誤して働かせた一番良い結果を行動へと移していく存在であると言えよう。

しかし、幼児期の子ども達は大人と異なる手段を使い、他者である相手に感情を表現する。子どもは大人と違い、頭で試行錯誤することを先にしない。頭で考えることより先に、まず身体で反応し、行動で表現する。いわば、体全体の感覚を凝らし身体で考えるのである。子どもが身体で反応していく要因は知識や経験がないからではない。子どもは知識より経験よりも、まず感覚に従って行動を起こす存在だからである。

幼児教育の提唱者であるフレーベルは、「外界の事物はだいたい、固体的、液体的、気体的の三状態をもって現われるので、人間にも全くこの、固体、液体、気体を知覚するに適した五官が備わっている。しかしまた、各物体はあるいは主に静的に、あるいは主に動的に現われるので、これらの感官はまた、二つの全く相異なった機関に区別されている。すなわち、一は主として静的物体の知覚を得るために、他は主として動的物体の知識を得るために働くものである。そこで、気体を知覚する感官は聴官と視官とに、液体を知覚する感官は味覚と嗅覚との器官に、それから固体を知覚する感官は温覚や触覚に区別されている。事物の知識は相反するものの関係によって得られるのであるが、その法則に従って、幼児にはまず聴官、聴覚が発達する、がそのつぎに、聴覚に導かれ、制約され、刺激されて視官、視覚が発達する。幼児のうちに、この二つの感官が幾分発達すれば、そのところで始めて両親やまた周囲の人々は、子供をして、外界の事物をおのおのの相反するものと対照させ、またこれを言葉と対照させ、つぎには記号と対照させて、それらの間に極めて緊密な関係を認めさせ、それらを交互共存のものとして、またいわば統一として結合させるようにすることができる。またそのようにして、幼児を、事物の直観、およびついでにこれが知識へ導くことができるのである」^(6b)と指摘し、感覚は幼児が生まれながらにして持ち得ている能力であることを立証している。したがって、フレーベルは「まずやってみて、それから考え、また行動に移してみる」という体験と試行錯誤を大切にする方法を提唱したのである。すなわち、子どもが感覚で行動を起こす切っ掛けは、幼児期特有の第六番目の総合感覚である「直観」(die Anschauung)が発端であることを訴えてきたのである。つまり、子ども同士が人間関係を築き、互いの心をつなげていくには、子ども自身が生得的に持ち得ている総合感覚としての直観が不可欠の要素であると言える。

幼児が生得的に持ち得ている感覚は、視覚・聴覚・味覚・触覚・嗅覚の他に、総合感覚として直観を入れた六つである。特に直観を発展させた共同感情と部分的全体感覚が、人間同士の関わりを築き、互いに心をつなげていくために必要な要素だと言えよう。「人間の本質」として直観された共同感情と部分的全体感覚は、大人になっても消え失せることなく、より立体的(大人と子ども、大人同士、大人と異年齢の大人など)な発展を遂げ、有機的な広がりを見せてくる。しかし、共同感情や部分的全体感覚の中で存在する人間は、お互いの感情を相手に意志を示し、受け入れ、理解してもらう相互理解していくために、

感情を相手に伝え、感情の共感を促す「感情移入」(Einfühlung)が必要となる。

哲学的思想における感情移入とは、「リップスやフォルケルトの美学における美意識の根本原理。認識の源泉となるべき精神の作用には、(1) 外的事物の源泉である感官知覚 (2) 内的状態の認識源泉である内的知覚 (3) 外的対象における内的状態を認識する感情移入がある。それゆえ感情移入は必ずしも美的態度にだけあらわれるのではないが、美意識には完全かつ純粹にあらわれる。人は諸種の情緒や感動を自己の音声のうちに表出するが、また他人の同様な音声に接すること、そこにこの情緒や感動を発見する。これは音声という客観的な性質と結合した情緒の発見というべきでなく、音声そのもののなかに情緒が直接体験されるのである。この心的過程が感情移入であり、そこには自我の内的活動の自由な展開が在し、自他の真の内的共為inneres Mitmachenが発現する。感情移入は、人間の表出に対して行われるだけでなく、生物や無生物に対しても象徴的感情移入が行われる。ゆえに美的価値とは感情移入説によれば客観化された自我感情であり、美的快感の必然性もそれにもとづく^(3a)と論じられており、三つの要素により構成されると考えられている。哲学的な思想の感情移入は、必然的に幼児期特有の行動に見ることができる。例えば、万物全体に感情を伝える「アニミズム傾向」(der Animismus) やフレーベルのボールや積み木で互いの感情を伝え合う遊びにみられる「模倣活動」(Imitieren des Spiel) の考えにつながりを見ることができる。

アニミズム傾向は、幼児期特有の傾向であり、生物や無生物にとわずすべての万物と感情を感覚で交換できることを意味しており、感覚での交換による交流が、万物全体との相互的感情移入を促していると考えられる。事例を挙げて考察する。

<事例1> Y附属幼稚園

幼稚園で、飼育小屋に行ってみると、子どもがウサギに話しかけていた。子どもが、「今日は、元気」となどと言っていたら、同じ子どもから「元気でしたか」という言葉が出てきた。おそらく子どもはウサギからの返事を感覚で感じ、言葉にして発していると考えられる。

事例は、子どものアニミズム傾向の事例であるが、アニミズム傾向は、幼児期の子どもの日常活動の一つであり、感覚による互いの理解し合う子どもの様子がよく現れていると言えよう。子どもが動物に挨拶をすると、当然のように動物から返事があると感じており、子どもは、動物に向かって喋っているのである。子どもが動物に喋る行為は、動物が自分の言葉を理解し、言葉を喋ると考えているからである。子どもが人間に対して語りかける行為と同様に、万物に語りかけていることは、すべての万物に生命を感じ、動物が言葉を喋る、草木が笑っている、石が怒っている、空が泣いているなどのアニミズム傾向を表現し、感覚によって互いを理解していることを裏付けている。感覚によるお互いを確認する行為は、感情移入と深く関りがある。また、ボール遊びにおいてフレーベルは、「子どもはすでに早くから自己の人間の素質と使命とにしたがって、自分自身を一つの全体と感じると同時に、また(無意識の段階においてさえ、万物のなかにそして各々のもののなかに、あるいは少なくともそれらを通してまたそれらでもって) つねに一つの全体を認め、把握し、自分のものにしようとするものであり、またそうせざるおえないということであ

る」^(8a)と指摘しており、ボール遊びは子ども達を一つの全体となる感覚をもたらすことができる遊びと考えられる。一つの全体となる感覚をもたらすボール遊びは、感覚の交流を行う遊びと言え、子ども達は自己の感情をボールに込め、相手に向けて発信し、感覚によって感情を共有し、自己の感情として捉え、お互いを理解し一つの全体となる感覚をもたらしていく遊びと言えよう。フレーベルのボール遊びの考えは、お互いの感情を感覚によって共有し、理解する要素が感情移入と深く関わりがあることを示唆している。つまり、アニミズム傾向とフレーベルのボール遊びの示唆から、幼児期は「感覚+体験+媒介物」という手段により、お互いの感情を伝え合うことができる時期であることがわかる。

子どもは、幼児期から感覚交流遊びを通して感情移入を行っているが、幼児期に感覚交流を体験する機会が少なければ、お互いの感情を交流する経験も減少し、感情を交流することができなくなると考えられる。しかし、幼児期に体験的感覚交流を盛んに行った人は、大人になっても感覚が体験として残り、自己の感情交流の手段として忘却することなく、自己の中に消えない形として所有することができるのである。つまり、フレーベルの「人間の教育」の立場に立つ教師は、子ども達に対し、模倣遊びを通した感情移入ができる支援を行っていくことができるのである。

5. 伝え合う心——幼児期は未分化な状態における感覚による遊びを通して、相手に感情を感覚で内面を伝えることができる時期である。言語能力がまだ伸張していない子ども達は、自分達の身体を動かして表現したり、ボールなどに自己の感情を込め相手に向けて投げたりすることによって、自己の感情を相手に伝えようとする。また逆に、相手の仕草や媒介物を通して相手の気持ちを感じた子どもは、感覚によって相手の感情を理解していくと考えられる。幼児期から児童期に移ると、言語能力もある程度完成されてくるが、幼児期と同様に感覚と同じ共有体験を経験として持つことにより、相手に感情を伝えることが可能となる考える。

事例を挙げて考察する。

<事例3> U小学校4年1組

Mちゃんが友達関係で悩んでいた。Mちゃんが悩んでいる姿を見て、IちゃんがMちゃんに「どうしたと」と声をかけていた。MちゃんとIちゃんは仲が良く、IちゃんはMちゃんの状況を聞き、真剣にどうしたらいいかを考えていた。二人では解決の糸口が見えなかったため、私の方に相談に来た。

事例を考察していくと、IちゃんがMちゃんの仕草や表情を感じ取り、初めて「どうしたと」と声をかけ、悩んでいる子どもの事を感じ取り、言葉で感じ取ることができ、自己の苦い経験を思う浮かべ照らし合わせることによって、Mちゃんとの感情を共有し、励ましていくことができたと考えられる。子ども同士が相手の気持ちを感じ取って初めて、お互いに感情を理解していくことができ、どうしたら困難を解決することができるかを考えることができたのである。つまり、児童期においては、「感覚+体験+経験+言語」という手段を持って、お互いに感情を伝え合うことができ、幼児期の感覚を重視した伝え合いではなく、児童期には児童期の異なった手段により感情を伝えることができるのである。

幼児期、児童期を過ぎ成人になると、今までの体験してきたことと積み重ねてきた経験と思考・判断からくる理論を基にして、お互いの感情を理解していくことができる。

<事例4>募金活動の事例

カンボジアの地雷撤去の募金活動を街頭で11時から山口市の道場門前で始めた。Y大学のボランティア団体が声をあげ、何のための募金か、どのように集めたお金を使用するかを切実に呼びかけることによって、説明を聞いていた人々が募金をしてください。また逆に、応援と共に彼らに対する励ましの言葉もかけていく人達もいた。

事例を考察すると、人間として生を受け成人となることによって、お互いが感じている心情を、相手に伝え、理解を得ていく過程が見受けられる。ボランティアの団員が一般の人に呼びかけることによって、団員の呼びかけを聞いていた人々は、地雷を経験していなくても人の生命を奪う去ってしまう危険な弾薬と感じ、地雷を撤去する方がカンボジアの人々の生命の尊重をできると判断したうえで、募金活動に協力してきたと考えられる。募金活動に協力した人々の思考段階は、おそらく、以前にテレビや文献などのメディアの情報を視覚的、聴覚的に受けていたことを基盤にして、団員の呼びかけに自己で考え、判断し行動へ移し協力したのではなかろうか。協力した過程には、以前からの体験や経験を基盤にした理論が存在していると考えられる。つまり、成人に近づくことによって幼児期で行う感覚の交流とは別に、「体験+経験+言葉+思考・判断+理論」といった手段により、相手との心情を交換できていくと言えるのである。しかし、成人は相手の心情を理解する上で理論が基盤にあると考えられるが、幼児期からの感覚的交流を経験していなければ共通した心情を伝え合うことなど成し得ないのである。だから、幼児期の感覚交流を盛んに行うことによって、相手の行動や言動、視覚、聴覚などから得た情報だけで、相手の心情を理解しうることもでき、言葉を持ちいらぬ思考や判断を用いた心のつながりを表現することができるのである。

現代の教育において他者と関係を築きを強め、人間としての心のつながりを大切にしようとするならば、幼児期からの教育実践において、教育者は子ども同士は当然であるが、大人と子ども、子どもと無生物との感覚的交流を第一に考え、人的、環境的支援を惜しみなく行っていくことが必要であると言える。

6. 異年齢集団でのつながり——幼児期からすべての万物との感覚的交流を行うためには、たくさんの人や物などを集団の中で直接触れていくことが必要と考える。集団の中で人間に影響する作用として、フレーベルは、「集団の中で生きるということは、非常に幸福なことである。その最高の目標は、純粋で人間的な生命を表示することであり、そのことはそれのみならず、心情を非常に高め強力にすることである」^(7b)と指摘しており、集団の中で人間が純粋に生命の表現活動を行っていくことともに、集団生活の中で人間関係のつながりが強力になるとも考えている。フレーベルは集団の中で生きることを論じることによって、『人間の教育』において人間の心のつながりを重要視していることが伺える。フレーベルは集団の中で、お互いの心のつながりを高め強力にする要素の一例として遊びをあげている。

フレーベルが集団生活の中で人間と人間の心情を遊びなどの表現活動によって高めていくと考えているならば、核家族化、両親の供働き、少子化、高齢化社会という問題がある現代社会の中で、子どもが人間関係を築く機会は減少し、心をつなげることはできないと考えられている現実が存在している。しかし、心をつなぐりに支障をきたす問題がある現代社会の中であっても、子ども同士や大人と子どもの心をつなぐりがより密になることがある。日頃子ども同士は、時間が許す限り子ども同士で様々な遊びで遊ぶ。子ども達は、外で野球や探検ごっこ、家の中でゲームやカードゲームなどをして遊びをすることによって、一人で遊んでいるように感じるが、友達とゲームを交代したり、順番を決めたりするなどして、友達とどうしたら争いをせず、楽しく遊べるかを真剣に考えて行動しているのである。また、親とのつながりは、学校週5日制の導入により、週末の家庭で親と接する機会が増えたり、共働きで子どもと接する機会が少ない時間でも、親子の時間を大切にしていこう傾向が見られるのである。そしてまた、高齢化社会を迎えることによって、子どもは人生の困難をくぐり抜けてきた人々と接する機会を家庭、地域や園で増やすことにより年輩の方との心をつなげていくことができるのである。社会という一つの集団の中に属している子どもは、たくさんの人と接する機会がある。しかし、大人達は、核家族化や少子化などを問題として捉えることによって、子どもが心を通じ合う機会をなくしていると考えてしまうのである。大人の間違った見解が、他者との関係を築かせず、いまここにある心を通じ合う機会を見失わせることにより、子ども達が相手に対して表現する思いやりややさしさも見失わせているのである。つまり、集団としての意義を捨て、個人の主観が他者への思いやりややさしさを子ども達に予感させなくなっていると言えるのである。

7. 現代の大人達——子ども達が思いやりややさしさの感情を欠如させている原因として、人間関係の減少が原因と言われるが、子ども達自身の他に子ども達に接している大人達の言動や行動にも要因があると言える。子ども達はいつの時代も先人達（自分に関わった大人達）を見て成長していく。幼児期であれば、自分より大きなお兄ちゃんやお姉ちゃんである。自分に関わった人達の行動や仕草、言動すべてが、次世代大人になる子たちに影響が及ぶのである。特に、子ども達に影響が顕著に表れるのが、大人達がいかに生きてきたかの「生き様」であると考えられる。「生き様」とは、大人達が自分がどのような困難を諦めず解決し、困難を糧にさらなる成長をしてきたかと言うことである。両親や身近な大人の「生き様」を間近で見てきた子ども達は、大人が行ってきたこと地域の人が行ってきたことを見て、肌で感じながら自己を伸張しようとする。つまり、大人達が子どもを虐待したり、大人が大人をいじめていることを見たり感じたりすることによって、子ども達も同じように相手に行動を取ってしまうのである。子ども達が大人達の真似をする例が、最近顕著に現れている若い母親の虐待や学校のいじめ、人を平気言葉などで傷つけることが挙げられる。ゆえに、子ども達の伸張の一部を担っている大人達が、自己の行動や言動が子ども達に影響を与えている事実を認め、正していくことが必要ではないかと考える。もし、大人が子どもとの接し方を改めなければ、子ども達が他者と接する機会を失い、他者との心を閉ざしてしまい、子ども達自身から他人を思いやる感情を生み出す機会を失っていくのである。子どもが大人の生き様を見て成長することを知っていたフレーベルは、子ども達を取り巻く大人の条件を「常に必ずその言動を純潔に明白にし、人間の価値と尊重とをよく体得し、自分等は神の賜物たる児童の保護者、教育者であることを自覚し、そし

て人間の使命と天職をよく認め、かつこれを完了することとなる道と手段をとを知らなければならぬ」^(6c) と指摘したうえで、大人達が子どもに接するには、誠実と愛を持って接することが必要であると強調している。

8. 思いやりとやさしさ——大人や教師が言葉で他者に対しての「思いやり」や「やさしさ」の感情を表現しようとするが、本当の「思いやり」や「やさしさ」を伝えることはできない。大人や教師の行動から「思いやり」や「やさしさ」を伝えることができるのである。大人や教師が行動で示した「思いやり」や「やさしさ」は、子ども達の内にある「思いやり」や「やさしさ」の感情を萌芽することができる。子ども達の「思いやり」や「やさしさ」の感情は、子ども自身の中から萌芽する感情であり、大人や教師が一方的、強制的に教え伝えることのできる感情ではない。子ども達は、子ども同士の遊びや行動を共にすることによって自己の中で萌芽していくのである。

<事例5>U小学校4年1組

SちゃんとNちゃんは、クラスの子も達から一歩離れた存在と感じていた。SちゃんとNちゃんの二人が同じ境遇を感じており、どうしたらいいかを互いが相手のことを思いながら考えていた。二人だけではどうにもならないと思い、私の方に相談に来た。

事例を考察すると、お互いが同じ境遇にあり、互いを思いやって解決方法を見出そうとしていた。二人の考える過程には、同じ境遇にいて互いに状況に共感することによって相手を思いやる心を自己の中に生みだしてきたと考えられる。つまり、感情の交流と共に、お互いが過ごした時間と同じ境遇における経験や体験を糧にして、人間は他者の痛みを知り他者への思いやりややさしさの感情を萌芽させることができるのである。ゆえに、教師が読むマニュアルにある強制的な感情を生み出す実践は、枠の決まった形だけの感情であり、何も子ども達のためにはならない感情の萌芽と考えられる。子ども達の教育を担う教師は、子ども達のためにと考えて行う実践が、実は子ども達にとっては害ある実践となってしまうのである。フレーベルが「さあ、私たちの子ども達に生きよう！」(**Kommt laßt uns unsern Kindern leben!**)という標語を用いたのは、子ども達が生得的に有している「思いやり」や「やさしさ」を確認することで、私たち大人が忘れがちな「人類の使命」(**die Menschheit Bestimmung**)を再学習するためではないだろうか。

9. 保育者や教師の役割——人間が心をつなげることによって、幼児期から子ども同士の感覚の交流から協調性や思いやりの心情に気づいていくことができるのである。子どもの学校現場においても同様に、強い者が、弱者に自分の固定観念から押しつけてしまうことがあるが、押しつけてしまう教育実践では、子ども達に心のつながりを求めることはできない。幼児期の子ども達には、遊びを通してすべての万物との交流を行うことが必要である。つまり、保育者は、子ども同士が関わり合える人的、環境的な援助を行い、子ども同士の感覚からの感情の交流の可能性が広がるように見守る姿勢が必要である。ゆえに、子どもの創造活動に制限し、干渉し、指導するのではなく、すべての子どもの自己の能力を示していく遊びを尊重し、お互いの遊びの中から感情を交換し、共感することによって、友達と楽しく遊ぶことで対立するものの調和を感じることで、思いやりの心情を自己

の中に基盤として気づかせることが大切になる。また、子どもが小学校段階では、幼児期の援助を基にして、子ども同士の感覚の交流と共に、子どもが達が結論に迷ったときに教師自身が「思いやり」や「やさしさ」を最大限に発揮し、子ども達と接していく姿勢が大切である。保育者と教師が自己の持っている「思いやり」や「やさしさ」で接していくことで、子ども達は「思いやり」や「やさしさ」の感情を萌芽させ、大人になっても自分の子どもを虐待などをすることなく、相手のことを思いやりやさしさを持って接していくことができるのである。

10. まとめ——大人になっての虐待を防ぐためには、幼児期からお互いの心のつながりを重視した援助を行い、保育者や教師が子ども達に自己の生き様を見せていくことが大切である。つまり、人間が人を慈しみ、相手に対して思いやりやさしさの感情を示す仁愛の感情を相手に示すことである。人が仁愛の心で相手に接していくことにより、お互いに相手を慈しみ思いやりを示す行動を行うことができるのである。また、お互いが仁愛の感情を持つことによって、人間は、万物すべてのものと共生していこうとする意識が萌芽していくのである。ゆえに、仁愛の感情を持つ大人ならば、仁愛の感情を表現し、幼い者や弱者を虐待する行為を取らず、相手の伸張を願い、援助支援していく行為を表現していくことができるのである。

引用・参考文献

1. 依田 新 監修：新・教育心理学事典：金子書房：1997年6月10日
2. 岡田 正章・千羽 喜代子他：現代保育用語事典：フレーベル館：1997年2月3日
3. 下中 邦彦：哲学事典：平凡社：1981年9月20日初版第12刷発行：a. pp 273-1項
4. キリスト教大辞典編集委員会：キリスト教大辞典：教文社：昭和38年6月30日
5. Friedrich Froebel 小原國芳・莊司雅子 監修：「教育の弁明」フレーベル全集（1）：玉川大学出版部：昭和52年6月1日
6. Friedrich Froebel 小原國芳 訳：「人の教育」フレーベル全集（2）：玉川大学出版部：昭和51年9月20日：a. pp 12 L 1-L 2 b. pp 52 L 6-pp 53 L 2 c. pp 28 L 7-L 9
7. Friedrich Froebel 小原國芳・莊司雅子 監修：「教育論文集」フレーベル全集（3）：玉川大学出版部：昭和52年12月1日：a. pp 524 L 8-pp 525 L 2 b. pp 97 L 14-L 16
8. Friedrich Froebel 小原國芳・莊司雅子 監修：「幼稚園教育学」フレーベル全集（4）：玉川大学出版部：1981年4月8日：a. pp 59 L 6-L 9
9. 日本ペスタロッチー・フレーベル学会：ペスタロッチー・フレーベル事典：玉川大学出版部：1996年12月25日